

ワイルド・レンジ(最後の銃撃)(OPEN RANGE)

2004(平成16)年7月18日鑑賞(ホクテンザ2)

★★★



監督・製作・主演=ケビン・コスナー/出演=ロバート・デュバル/アネット・ベニング/
マイケル・ガンボン (日本ヘラルド映画配給/2003年アメリカ映画/140分)

……2人のカウボーイを主人公とした、最近珍しい古典的(?)西部劇。西部劇大好き人間のケビン・コスナーが監督・製作・主演をつとめた映画で、「全米ロングラン大ヒット!」と宣伝されているが、日本では公開劇場も少なく、マイナーな扱い。そして、私の目では、その出来はもうひとつ……?

第4章

スカットとスッキリ

久しぶりの本格的な西部劇だが……?

最近のハリウッド映画は、話題のシリーズものが増える一方で、本格的な西部劇はめっきり少なくなっている。

そんな中この映画は、「全米ロングラン大ヒット!」と新聞で宣伝され、チラシにも「ハリウッドが生んだ最高のジャンル西部劇の中でも最高の1本」「クリント・イーストウッドの『許されざる者』以来、久々に成功を約束された本格西部劇」「思わず心動かされるこの作品は、この夏最高の映画のひとつだ」と絶賛(?)されている。

しかも、監督・製作・主演したのがケビン・コスナーだから、日本でもかなりの評判を呼ぶ作品かと思っていたが、大阪では天六のホクテンザ2など、ごく一部のマイナー系の映画館で公開されただけのさびしい取り扱い。これは一体なぜなのだろうか……?

カウボーイの生活とは?

カウボーイというと、何かカッコいいように聞こえるかもしれないが、要は、牛を放牧しながら旅を続ける大変な肉体労働の仕事。彼らがいつも戦わなければ

ならないのは、自然。つまり、雨や風、嵐、そして逆に日照りなど、人間の手にはどうにも負えない自然条件だ。

しかし、そんな旅の中で築かれていくカウボーイ同士の仲間の絆は、当然強くなっていくもの。こんな生活を10年以上続けているのは、ボス・スピアマン（ロバート・デュバル）とコンビを組むチャーリー・ウایت（ケビン・コスナー）。チャーリーは寡黙で控えめな男だが、ボスを心の底から尊敬している、早撃ちのガンマン。

今日もボスとチャーリーの2人は、若い助手2人を連れて放牧の旅を続けていたが、今日はひどい嵐に見舞われそう……。

自由なカウボーイをさえぎる者は

西部劇には、善玉と悪玉が登場するのが定番。この映画に登場する悪玉は、ハーモンヴィルの町を仕切っている悪徳牧場主のデントン・バックスター（マイケル・ガンボン）。

「俺の牧場を勝手に通過することは許さない！」というスタンスだ。こんな悪徳牧場主だから、町の保安官も当然その手の内に取り込んでいる。したがって、町の人々は誰もこのデントンの意向に逆らえない状態。

こんな町に助手の1人を向かわせたボスとチャーリーたちだったが、その助手が予定どおり戻ってこない。これはきっと何かおこったにちがいない……。

お医者様の登場

ボスとチャーリーが町へ行くと、案の定、助手はトラブルに巻き込まれて、保安官の手によって牢屋の中に……。

しかも、顔や後頭部を打たれて大ケガを。ボスとチャーリーは、この助手をお医者様のもとへ連れて行っただが、そこで出会ったのが美しい人妻（？）のスー・バーロー（アネット・ベニング）。イヤ、実は彼女は人妻ではなく、医者をやっている弟の実の姉だった……。

このスーと寡黙だが助手たちに対して優しい目をそそぐチャーリーとの間には、いつしか愛が……。

サブタイトルとなっている「最後の銃撃」の出来は……？

用心棒を含む大勢の手下たちが待ち受ける町に乗り込んでいったのは、助手の1人を痛めつけられ、もう1人を殺されてしまったボスとチャーリーの2人。町の人たちの間接的な応援はあっても、直接戦うのは2人だけだ。この戦いは結構時間をかけ、場所を移動しながらの長期戦となった。

この戦いを見ていると、鉄砲の弾とは意外に当たらないものだと思えてくる……。一瞬のうちに勝負がつくのではなく、かなり戦術の妙が加わってくるのは、かえって面白い面があるものの、「西部劇史上もっともリアルなガンファイト」とチラシで絶賛されているほどでは……？ 「筋書」どおり、ボスとチャーリーは負傷しながらも、ついに悪玉の牧場主のデントンをやっつけた。めでたし、めでたし……。

総評

大自然をバックとして、2人の男の友情と信頼をベースに勧善懲悪の姿を描いた定番モノの西部劇だが、ストーリー展開といい、セリフ回しといい、その出来は正直いってもうひとつ。

ヒゲを伸ばしたケビン・コスナーの魅力も今ひとつで、輝いているとはとてもいえない。アネット・ベニングの魅力はますますだが、これはあくまでロバート・デュバルとケビン・コスナーを引き立てるための補助役にすぎず、これも西部劇の定番的な扱い方。もうひとつひねり欲しかったと思うのは私だけだろうか……？

ちなみに、7月18日の日曜日の晩9時40分からの鑑賞だったが、この日の観客は私を含めてたったの4人だけ。これでは、この映画が評判を呼ばないのも当然か……？

2004(平成16)年7月22日記